

ゴキブリの逆襲

井ノ上學

ゴキブリの逆襲

俺って嫌われ者なんだ。見た目は黒光りしていて、触角は長いし、歩く時はカサカサッて音立てるし、たまに飛ばば、ほとんどの人間が悲鳴をあげる……。

別に何も悪気はないのに、ただ食べ物を求めて歩いているだけなのに、俺を見つけると人間は、逃げるか変な薬をかけるか、何か物で叩きつぶそうとする。俺って結構しぶといから、即死というのはめったにないんだ。だから、どうせ殺すなら瞬殺してほしい。それがせめてもの救い。

俺の死に方に餓死というのは、ほぼないんだ。人間の髪の毛一本で約三ヶ月ぐらいは生きられるからね。でも、やっぱり油が一番大好き。だから、台所がよく行く所。ここはなぜか油が多いんだ。死んだ親父が教えてくれた。

親父は死ぬ間際に、俺にこう言った。

「お母さんを頼むぞ！」

そのお母さんも昨日、人間に殺された。

俺ってなぜ嫌われているのかな？

「汚いからじゃないの？」

その声がする方を見上げると、若い人間が立ち尽くしていた。

「俺の言葉がわかるのか？」

俺は初めての体験に少し動揺した。

「その台詞はどっちかというと、こっちの台詞だけだな」

人間はそう言って、しゃがみ込んだ。

俺はその不思議な若者にこう言った。

「お前は、俺が怖くないのか？」

「全ての人間がゴキブリを怖がっていると思うなよ」

人間は少し苛立っていた。俺はこの際だから、この人間に言いたいことを言うことにした。

「俺からしたら、人間の方がよっぽど汚いし、醜い部分がたくさんあると思うけどね」

人間は頭をかきむしりながら、椅子に座り、何かを書いていた。

「人間の掌の方が、俺の体よりもたくさん雑菌が付いているんだぞ！」

人間は何も言わずにひたすら何かを書いている。

「俺の甲殻は放射能も防げるんだぞ！ 凄いだろ！」

「……………」

「おい、無視かよ」

「ダジャレか？」

「ダジャレってなんだ？」

そんな感じの他愛のない会話が数回続き、俺は最後の質問をした。

「どうして、お前ら人間たちは俺達を毛嫌いするんだ？何が気持ち悪いんだ？答えてくれ」

人間はまた何も言わずに何かに没頭している。

俺はイライラしてきた。ゴキブリだからってなめるなよ。そんな怒りの気持ちが、だんだん抑えられなくなり、俺は久しぶりに羽を使った。そして、人間の方に向かって行った。その瞬間、人間が俺の視界から消え、横に顔を向けると人間が何か長いモノを持ちながらこう言った。

「それが気持ち悪いんだよ！」

パンッ

完